

近世中期までの酒田湊・御米置場

本間 勝喜

はじめに

酒田湊の御米置場は、出羽幕領の御城米（年貢米）を百姓直廻しで江戸廻米するために、河村瑞賢の提案によって設置されたものであった。それより徳川幕府が瓦解し明治維新を迎えるまで二百年近く存続し利用されたのである。

御米置場は火災の被害から御城米を守るべく、酒田町の家並から引離れて建設されていたのであるが、それでも何度か火災の被害を蒙ったのであり、その度に改築されたり再建されたりしたのである。また御米置場は御城米の海上輸送の便宜のため、酒田湊の最上川河口に位置したので、洪水の被害を受けやすかった。そのため、年々のように土手の分の補強などのため、川除普請などを行う必要があったし、時には御米置場自体にも洪水が及んで、地面が欠崩れるといったこともあり、やはりその度に改築したりする必要があったが、場合によっては移転することもあった。そして、出羽幕領各領の利用上の必要から一部改造されたりもした。

つまり、御米置場は二百年の間変わらず、同じ位置にあったり、同じ規模や配置をしていたわけではなく、何度か改築されたり、改築されたり、そして移転されたりしたのであった。

言ってみれば、二百年近くに及んで酒田港に設置され利用された御米置場にも、様々な歴史が存在したことになる。本稿では、河村瑞賢による建設時から元禄・享保年間を経て宝暦年間（一七五一—一六四）までの御米置場について、本戸口の数などその内部施設の変更などに注目しつつ、九〇年ほどの歴史について検討したものである。

一、近世前期の御米置場

酒田湊の御米置場は、寛文十二年（一六七二）に出羽幕領の御城米（年貢米）を百姓直廻しで江戸廻米するために、河村瑞賢の提案と設計のもとに建設された施設であった。なお、河村瑞賢側の指示や監督のもとに実際に御米置場の建設を担当したのは庄内藩（酒井家）であったし、その後の維持や改築等も庄内藩が担当した。

河村瑞賢が建設させた当時の御米置場の設計図（指図）が庄内藩の御抱え大工棟梁だった小林家に残されている。^①「酒田御蔵絵図」の表題で、「小林瀬左衛門ひかへ」とある。^②瑞賢方より指示を受けて小林瀬左衛門が作成したものであったかとみられる。

今、その絵図によって建設当時の御米置場の規模や配置等について述べておきたい。

まず、御米置場図の真中ぐらいの位置に「御公義様御城米御蔵屋敷」と記されている。一般的には、「御米置場」とか「瑞賢倉」とか呼ばれたが、当初は「御城米御蔵屋敷」と称されていたものとみられる。その名称が実際の利用形態と少々ズレていたことから、後になると一般的には御米置場とか瑞賢倉と呼ばれるようになったものと推測される。

御米置場の東西の間数を示したものとみられるが絵図の下方（南側）に「惣間八拾間」と記されている。しかし、別に絵図には東西が「土居内法七拾八間」、南北が「土居内法四拾九間」とも記されており、御米置場の内部は東西七十八

間（約一四二メートル）に南北四十九間（約八十九メートル）だったことになり、記入されている「惣坪数三千八百貳拾貳坪」に一致する。御米置場の外側は土手によってほとんどが囲まれているが、その土手については、二力所に「土手高さ七尺、敷四間」と記されており、御米置場を囲む土手は高さが七尺（約二・一二メートル）で、敷（幅）が四間（約七・三メートル）であつたことが知られる。敷が四間というのはかなり幅広い土手という印象である。ともかく敷が四間とすれば、土手を含めた間数は東西八十六間、南北五十七間ということになる。南北はともかく、東西は前出の「惣間八拾間」よりは六間（約一二メートル）だけ超過することになる。惣間八十間に収めるとすれば土手の敷が一間（約一・八メートル）でなければならぬことになるがどうであろうか。今は絵図に記されている通り、土手の敷四間とみておきたい。

それでも、右の絵図は、「酒井家旧記」^③に、

…川村瑞賢酒田江罷下、夫々差図有之、七、八拾間四方浜之沙引ならし、四方土居芝、惣柵をふり…

という記述にほぼ一致しているのであり、河村瑞賢方の見立てで最上川沿いに臨んだ砂山を引き均して七、八十間ほどの平地を創出し、そこに御米置場が建設されたわけである。なお、土手には芝が植えられたのであつた。

御米置場には木戸（門扉）が四力所記入されており、そのうち南側に三力所、西側に一力所であつた。木戸の幅は南側の三力所はいずれも九尺（約二・七メートル）だったので、西側の一力所も同様であつたとみられる。南側の木戸三力所は新井田川・最上川の方に臨んでいたもので、御城米の出入口であり、残る西側の木戸一力所は関係者の通用口であつたかと推定される。例えば、後年の記述であるが、御城米浦役人の場合、^④

一、酒田二而御米置場御囲江御米積入候得ハ拙者共毎日之様二罷出申候と、御城米が野積されると毎日のように御米置場に出向いたとする。御城米の出入を監視すると共に、廻米作業の監督のためであろう。

四力所の木戸の分を除き、残る部分はすべて土手で圍繞されていたが、土手には柵木が立てられており、惣柵木数貳千百拾八本 但シ四寸壹丈木

内貳百五拾八本 六寸貳間木

というように、全部で二一八本の柵木が立てられたのであり、土手の長さの合計が二四八間とみられるので、一間（約一・八メートル）に八・五本余りに当たり、大体二〇センチメートルに一本ぐらいの間隔で高さが一丈（約三メートル）以上で太さが四寸（約一二センチメートル）と六寸の柵木が立てられていたもので、土手より不審者等が侵入できないためのものであった。

御米置場の内部の建物であるが、まず南向の三つの木戸近くに二つの手代家がある。東寄りの「瑞賢手代家」と西寄りの「漆山・大山手代家」である。両者とも四つの部屋より成り、廊下や床の間、押入れ等が付いていたようであるが、後者の方がやや大きな造りになっていたようにも見受けられる。宿泊する人数によるものか。後述のように、これらの「手代家」は座敷造りになっていたようである。

御米置場の建設地を決めたうえ、実際の建設作業を指揮するために、河村瑞賢の手代たち数人が酒田に出張して来て、初め船宿の二木九左衛門方に滞在したが、建設工事が始まってしばらくすると、御米置場の内に詰所である「瑞賢手代家」を設置して、以降工事が竣工するまで同所に滞在したものとみられる。工事が完成して瑞賢の手代たちが酒田を去ると、代つて長湊代官所（現東根市）より出張してきた代官手代たちが駐在し、支配地村々の御城米の江戸廻米の作業を指揮したのである。

もう一つの「漆山・大山手代家」は同様に漆山代官所（現山形市）の手代たちと庄内・大山役所（現鶴岡市）の手代たちが詰めるための施設であった。なお、庄内・大山領は当時長湊代官松平清兵衛の支配であり、大山役所は長湊代官所の出張陣屋であつた。本来であれば、長湊代官所と大山役所の手代が一緒に居るべきであろうが、おそらく出張する

手代の人数から、支配上関係のない漆山代官所と大山役所の手代たちが同居する形になったものと推測される。

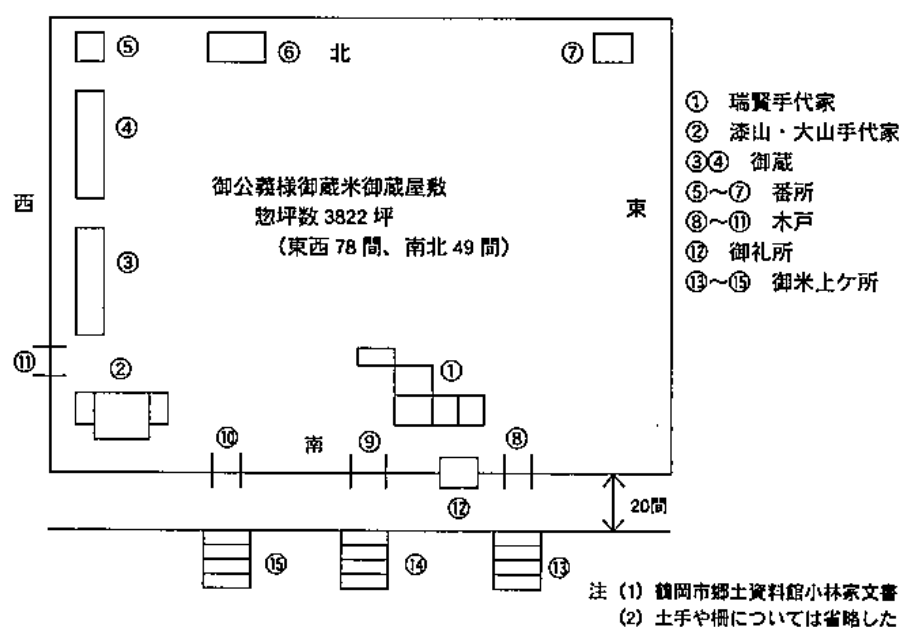
御米置場には、二つの「手代家」のほか、西寄りに細長い建物が二つ並んでいる。どちらも「御蔵」と記されており、十五間（約二七・三メートル）に二間（約三・六メートル）で、三〇坪の建物である。おそらく御城米（年貢米）を御米置場に野積する際に使用する台木、菰、藁や海船を係留するなどに用いる碇、綱などを保管するための倉庫であったようである。なお、使用していない時に、雨・雪などが降りかかって保管の物品が痛んだりしないように通常の物置小屋の造りになっていたはずである。なお、これらの建物は萱屋根になっていたようである。

そして、北寄りに三つの小さな建物が記されている。絵図では、大きさがそれぞれ異なるように描かれているが、実のところは同じ大きさであり、九尺（約二・七メートル）に二間（約三・六メートル）で、三坪の建物であった。南側にある三つの木戸（門扉）に対応するように置かれた「番所」であった。おそらく幕領各領より選ばれて出役した名主たちが滞在する詰所であると共に、御米置場に出入する御城米や人を昼夜とも監視する番所であったようである。そのため宿泊もできたようである。

参考までに、後年の享保十年（一七二五）とみられる十一月に御城米浦役人が書上げた記録の一条に、

一、御蔵萱屋根行間十五間二二ツ立申候、又公義役人衆被居候座敷二ツ立、其外番所二ヶ所皆々殿様より之御物入二而御座候

酒田御蔵絵図（寛文12年）



とあるので、小屋、詰所、番所のことは基本的に一致しているといえる。ただ番所の数を二カ所とする点では誤っている。

「酒田御蔵絵図」に描かれている御米置場内部の建物・施設は以上である。これらの建物の建設を主として担当したのが庄内藩の御抱え大工であり、その棟梁の余語家の勤書⁹にも次のようにある。

一、酒田すいけん蔵屋敷柵木・門・手代家共二建

それ以外に稲荷社なども当初から勧請されたものではないかと思われるが図面には描かれていない。

御米置場の外縁部にも一言すれば、土手の外側には堀が廻されていたようであるが、絵図には堀は描かれていない。南側に位置する木戸のうち東から一番目と二番目の間に「御札所」がある。高札場であり、その高札の文言については「浜御陣屋御高札之写」¹⁰に転載されている。

御米置場の木戸からであろうが、新井田川・最上川の「川はた迄式拾間」とある。約三六・四メートルである。

川岸のところには、階段のようなものが三方所描かれており、いずれも「御米上ヶ所」とあり、ここで御城米を水揚げし御米置場に搬入したのである。そして海船に御城米を積込む時には送り出したわけである。御城米の水揚げや積出しの作業に従事したのが丁持である。

参考までに、御米置場が完成し、初めて御城米が搬入された月日であるが、酒田町年寄たちが享保十年（一七二五）とみられる巳十一月に提出した覚書¹¹に、

一、子二月二十四日最上御城米始而酒田へ着船仕、御米置場へ野積仕候

と記されており、二月二十四日に村山幕領の御城米船が初めて酒田湊の御米置場前に着岸し、御城米が御米置場に搬入されて野積されたとする。ところが、「酒田丁持関係文書」¹²には、

…同拾貳年壬子三月、始而御城米蔵入御座候…

とあり、御米置場に御城米が初めて搬入されたのは三月中のこととし、御城米の初搬入の日付をめぐって記述が異なっ

ている。

ところで、御米置場周辺の「火の用心」について、酒田町年寄の覚書には続けて、

一、火之廻之儀、山口伝右衛門・栗田伝右衛門兩人兼而被仰付被指置候間、二十四日^{二二}晩より兩人十日代り相勤候

とあり、庄内藩士の山口伝右衛門と栗田伝右衛門が御米置場周辺の「火之廻」を命じられていて、十日交代で二月二十四日より始めたのであるが、これは御城米が御米置場に野積されている期間だけ行われるものであり、野積されると同時に始めることになっていたもので、その点から寛文十二年二月二十四日に初めて御城米が御米置場に野積されたと判断される。因に、山口伝右衛門は物頭兼酒田普請奉行であり、栗田伝右衛門も酒田城付の物頭だったとみられ知行二百石であった。¹³

二、元禄前後の御米置場図

『酒田市史』（旧版）に、年代は記されていないが、南側の木戸（門扉）が三つある御米置場図が載せられている。¹⁵ もともと、この絵図は御米置場のみを描いたものではなく、最上川川口付近を描いていて、その中に御米置場も描かれたといったものである。そのため、御米置場内部の建物の詳しい配置などは描かれていないが、木戸の位置とその数は明らかとなる。すなわち、木戸は南の新井田川・最上川の側に三つが、西側に一つが描かれている。

従って、木戸の位置や数については、前節で紹介した河村瑞賢が建設させた時の御米置場の場合と同じであったことになる。しかし、御米置場の前の川岸のあたりは石などによって堅固に護岸工事が施されていることが窺える。また絵図の中に「此角より上河戸迄式拾五間余、此御門より水きわ迄四十三間」と記入しており、「此角」や「此御門」が具体

的にどの角や門扉を指すのか明らかでないが、寛文十二年（一六七二）当時の土手や木戸から「川はた迄式拾間」とあるのは明白に異なっている。これらの点から、『酒田市史』（旧版）掲載のものは寛文十二年当時を示した絵図ではなく、それよりも後のものと判断される。御米置場はともかく、川除普請がかなり大掛に行われた直後のものかと推測される。その場合、特に洪水がなくとも年々のように川除普請を行っていたものであるが、やはり大洪水により大きな被害を蒙った直後にこそ、大掛な普請が行われたものとみることが妥当であろう。

ところで、後出のように宝暦五年（一七五五）六月の御米置場図では、新井田川・最上川側の木戸（門扉）は四つとなっていた。ある時期に至って、御城米用の木戸口が三つでは不足であることから、一つ増して四つとしたものである。木戸口が不足と意識されるに至った理由は何であろうか。出羽幕領が増加しつつあったことから、御米置場に搬入され野積される御城米の量が増加しつつあったことにもよろうが、むしろ御米置場を利用する代官所・代官役所の数が増加したことによるものではなからうかと思われる。

寛文十二年（一六七二）以降、十数力年の間では御米置場を利用する代官所・代官役所は長湊代官所、漆山代官所、大山役所の三つのままであったので、御米置場の御城米用の木戸口も三つでよかったのである。^⑩ところが、貞享四年（一六八七）以降、出羽幕領の支配に大きな変更が生じ、御米置場を利用する代官所・代官役所が四つになったという変化もみられたのである。

すなわち、貞享四年（一六八七）八月に、長湊代官松平清三郎の支配地の一部高三万五千石余が割かれて、新たに寒河江代官所が創設された。^⑪これにより、御米置場を利用する代官所・代官役所は四つになったことになる。間もなく、庄内藩の手によって御米置場の改築が実施され、南側の木戸口が四つに増されたものとみられる。

しかも二年後の元禄二年（一六八九）五月頃に、長らく行われていた庄内藩（酒井家）・米沢藩（上杉家）両藩の預地支配が廃止となって、新たに高畠代官所（現高畠町）が設置され、置賜郡屋代郷（三万石）及び庄内・丸岡領（二万石）

と由利領（二千石・現秋田県象潟町）がその支配に入ることになった。¹⁸ 置賜郡なので屋代郷の御城米はともかく、丸岡・由利両領の御城米はこれ以後御米置場を利用することになって、木戸口がもう一つ必要になったといえそうである。ところが、高島代官となった小林儀助が支配を開始する直前に自殺したことから、同年中に丸岡・由利両領は寒河江代官所の支配に変えられたのである。¹⁹ そのため、丸岡・由利両領の御城米については御米置場の木戸口は寒河江役所の分を利用するか、大山領の分と一緒に大山役所の分を利用することになって、御城米用の木戸口は四つのままでよいことで済んだと推測される。

以上から、酒田湊・御米置場の南方の新井田川・最上川側に置かれた木戸口（門扉）が三つだったのは、貞享四年（一七八七）までのことで、おそらく翌元禄元年には四つに改められたものと考えられる。

従って、『酒田市史』（旧版）所収の御米置場図は、貞享四年（一六八七）以前の姿を示したものであったといえる。しかも、寛文十二年（一六七二）以降、貞享四年までのうちで、酒田に大きな被害を与えた最上川の洪水について『酒田市史年表』より拾ってみると次の二カ年をあげることができる。

○天和二年（一六八二）

四月三日庄内空前の大洪水で新井田蔵に三尺浸水し、三万七千俵の濡米を出す。²⁰

○貞享二年（一八八五）

四月庄内大洪水、茨野新田の堤防百メートルが破れ、門田村の水門を破る。このため川北一帯が氾濫、人馬が多く死ぬ。²¹

右のうち御米置場に何らかの被害を与えそうなのは天和二年の大洪水である。庄内藩の新井田蔵には三尺の浸水があつて、同所にあつた年貢米には大きな被害が及んだ。幸い御米置場の御城米に直接の被害はなかったようである。²² 通常の水面から二十七尺（約八・二メートル）ほど高い場所に御米置場が設置されていて浸水の被害を免れたものとみられる。²³ しかし、川岸や土手に大きな被害を蒙ったことは十分に考えられるのであり、そのため直後に石塁などで堅固に

護岸工事等を行った可能性は高いのではなからうか。

因に、当時酒田町奉行となっていた山口三郎左衛門（伝右衛門）の「天和御改勤書」に

…天和三年亥之年公儀御米置場川除並破損修覆等被仰付候

とあり、天和三年（一六八三）に御米置場付近の川除普請や破損個所の修理等を実施したとする。

それらを考慮して、小稿では『酒田市史』（旧版）に掲載されていた御米置場図は天和三年頃のものと考えておきたい。参考までに、「酒田古絵図」に御米置場や酒田湊付近も描かれている。²⁶ 工藤定雄氏等によって元禄・宝永頃のものとして定されている。²⁶ これによれば、河口近くの最上川では御米置場の付近のみが最上川に突き出ていたようである。その上に当たる東側や下手の西側は最上川の水勢によって次第に欠け崩されたのに、御米置場の付近は護岸がしっかりしていて、そのため突き出るような地形になっていたものか。

そして、御米置場の内部であるが、屋根のある建物有五つみえる。代官所手代の詰所や番所、倉庫などであろうが、すべてではなく主なもののみを描いたものかと推測される。建物は屋根や柱はあっても四壁はなくて吹抜けになっていたようにも見える。²⁷ しかし、詰所、番所はもちろん、倉庫なども板や土壁などで囲っていないくは備品などの保管には不適當だったはずで、実際には四壁は囲われていたとみられる。

問題なのは出入口（木戸）が一カ所しか描かれていないように見えることである。建設された当時でさえ通用口を含めて四つの木戸口があったわけで、利用の仕方から考えれば木戸が一つということは到底ありえないことである。

その点から、この「酒田古絵図」はあくまで絵画であり、建物や風景をそのまま描いたものではないことを銘記すべきで、必要によって誇張されたり省略されたりしているはずである。出入口が一カ所であったり、御米置場部分が最上川に突き出たようになっていいることなども、御米置場を強調するため、必ずしも実際通りに描かれたものではなかったものと考えられる。特に、出入口（木戸）が一カ所になっているのは、御米置場の機能をあまり理解していない者が

描いたためであろうかと推定される。

従つて、この古絵図は元禄・宝永頃に描かれたとしても、その中の御米置場が当時の姿を考えるうえではあまり参考にし得ないものといえる。

三、近世中期の御米置場

享保元年（一七一六）四月に幕府の幕領巡見使が来庄し、酒田湊の御米置場にも見分に立寄つたのであるが、その時の酒田町年寄の覚書には、

一、御米置場出人足 老ケ年二式千五百人程

とあり、御米置場のために酒田町々より概数で一カ年に二五〇〇人ほどの人足を出しているとする。御米置場を洪水などから守るために、川除普請などが不可欠で、年々多くの人足を要したのである。

同年八月二十三日に、出羽・長瀬代官（現東根市）の秋山彦太夫が、同二十六日に漆山代官（現山形市）の神保甚三郎が相次いで酒田に来て御米置場を見分した。³⁰ 同月に寒河江代官の柘植兵太夫も酒田に一泊していた。³¹ 柘植代官の場合、支配地のある由利郡（現秋田県）に赴くためであつたが、ついでに御米置場を見分したことは十分に有りえる。このように、幕府・出羽代官二名ないし三名が御米置場を見分したことから、御米置場が改築されるなど、かなり大きな工事が行われ、それを幕府代官たちが検分したという可能性はある。同年五月下旬に雨が降り続いて最上川等で洪水が起こつて³²いることに関係があつたものか。

享保三年（一七一八）春に御米置場前水除御普請が行われ、それに伴い酒田町々より明俵一一六〇俵が納入された。³³

この時はそれほど大がかりな普請ではなかったとみられる。

参考までに、享保十年十一月に書上げられた「酒田浦役人勤方之覚」の冒頭に、

一、羽州御三ヶ料御城米最上川積渡之節、自然川船破船等御座候得者^{③④}：

とあり、当時村山郡の幕領三領の御城米（年貢米）が最上川により酒田・御米置場に積下されることになっていたとする。前出、幕府三代官のことからも明らかのように、長瀨、漆山、寒河江の三代官所が置かれていたものである^{③⑤}。そのほかに、庄内幕領（大山・丸岡両領）の分があつたので、御米置場の御城米出入のための木戸（門扉）は長瀨口、漆山口、寒河江口、庄内（大山）口の四つであつたとみられる^{③⑥}。

宝暦五年（一七五五）七月に書上げられたとみられる「承露盤」^{③⑦}所収の年欠の御米置場についての次のような記録は元禄元年（一六八八）以降、十八世紀中頃までの規模や配置を示しているものと推定される。すなわち、

御米置場南向（東西八十三間、南北五十三間）、四方土居から堀四方柵立囲有之（柵木数千八百四十三本、但大小力柱ともに）、御門四ヶ所、外二御門壹ヶ所（南方二四口、西方二一口）、御番所五ヶ所二在、御綱・碇入候小屋有之、台木式ヶ所、御囲前二御高札場有之

というもので、規模は東西八十三間、（約一五〇メートル）、南北五十三間（約九五メートル）で、最上川に面して南向で、門扉（木戸）が四力所あり、ほかに西向に門扉が一つあつた。この時の内部面積は四四〇〇坪ほどになり、寛文十二年（一六七二）の建設当時の三八二坪に比べると、大幅に拡大したことが知られる。代官所の増加や御城米の増加に応じたものである。この間に大規模な拡張工事があつたわけである。内部には番所五力所、綱・碇を入れる小屋と台木小屋（二力所）が置かれていたとする。つまり、御城米が出入する南向きの木戸が四口で長瀨領、漆山領、庄内幕領（大山領）に寒河江領が加わったというように、当時の出羽幕領の支配関係に一致するものである。

享保十一年（一七二六）五月八日に酒田で大火があつた。片町（上本町）から出火して日和山下まで二〇七七軒が焼

失したという権九郎火事である。³⁹この時、御米置場は無事だったものか。特に記されていないので類焼しなかったものであろう。

ところが、三年後の享保十四年九月九日には御米置場が火災になり焼失した。⁴⁰翌春までに再建されたはずである。

因に、それ以前、享保十二年八月頃に村山幕領では、それまで長瀬・漆山両代官所の出張陣屋であった尾花沢役所が代官所に昇格した。⁴¹しかし、代つて長瀬役所が一時出張陣屋に格下げされたようであり、⁴²村山幕領は引続き三領のままだったことになる。従つて、火災後に再建された御米置場の御城米の出入口は四つのままでよく、ただ木戸の呼称が長瀬口から尾花沢口に変更されたものとみられる。

元文元年（一七三六）にも、

惣錢ノ百拾貫貳百四拾八文 両替四ノ九百二十文右之通酒田御米置場川前囲御普請出来間数御入用諸色御人足一紙如是御座候…⁴³

とあり、御米置場前の囲（土手）の工事があつたことが知られる。なお、工事した囲の長さが一〇八間三尺で、徴発された人足が延べ一〇三九人であり、そのうち酒田町々から六六七人、庄内幕領村々から三七二人であつたし、⁴⁴惣費用が金にして二十二両余であり、大規模な工事ではなかつたのである。おそらく、この程度の工事は年々のように行われたものであろう。

延享元年（一七四四）春、川北の遊佐、荒瀬、平田の三郷に対し御米置場普請が命じられたという。⁴⁵酒田町々ではなく、川北三郷に普請が命じられていることから、おそらく洪水などがあつて囲（土手）などに決壊があつたものか。

宝暦元年（一七五一）三月二十九日に酒田で大火が起こつた。豊後火事と称され、荒瀬町（一番町付近）の民家から出火し、二四〇五軒を焼き、米穀一〇万二六〇〇俵余を焼失し、八十名の焼死者を出すという大災害であつた。⁴⁶村山郡谷地郷の『大町念仏講帳』には、酒田大火で三分二ほど焼失し、損害は金高にして一〇万両ほどにおよんだとする。⁴⁷そ

の際、御米置場も焼亡したのであった。⁴⁸

同年五月に提出された庄内幕領村々の請書に、

…先達而御田類焼之砌、急二小屋掛取繕等仕候、入用台木等も不残焼失

とあり、御城米の野積に際して使用される台木等まで残らず焼失したのであったが、御城米廻米の業務を行う時期が迫っていたので御城米の受入れのために、応急的に小屋掛けして間に合わせたとする。その際の工事の人足について酒田町からの次のような願書が残されている。

乍恐書付以奉願候⁴⁹

御米置場御田柵焼失之分、此度急二御立被遊候二付、右柵立人足大概貳千人程御入用之由被仰付候、尤丈夫成者斗指出候者半減二而茂相済可申候段被仰付承知仕候、就夫奉願候、此度大火二付諸方出人足多ク焼残り之者斗二而相勤難儀仕候、依之右柵立御人足ハ郷方へ手伝被仰付被下置度奉願候、鋤仕事之儀二御座候得者此節御町方鋤等モ無御座難相勤御座候間、郷方へ被仰付被下置候ハ、弥御普請方御考之通半減之御人足二而御間合候様奉存候二付、乍憚御歎申上候、奉願候通被仰付被下置候ハ、御町之者共此節別而難有仕合可奉存候 以上

末四月

池田傳五兵衛

伊東傳内

渡部隼人

かゝ屋与助

御町奉行所

これによれば、御米置場普請の柵立人足として大概二千人程が必要であると申し渡されたが、人足に出る者が丈夫な者ばかりであれば、その半分でも済むようにも言われたことに対し、酒田の町役人たちは、今回の大火でどちらでも人

足を多く必要としているし、類焼しなかった者ばかりで勤めるのは難儀であるうえ、工事の際に必要である鍬なども多く焼失しているので働きようもないので、町方人足ばかりでは困難であるとして、郷方からも人足を徴発して手伝ってほしいと歎願したものである。

従って、大火の後の応急処置としての小屋掛けは、御米置場に搬入された御城米を安全に保管するため、とりあえず柵を建てることを中心に行われたことが知られる。

その後、廻米業務が終了し、御米置場に野積みの御城米がなくなると共に、御米置場の内に建物や小屋等が本格的に再建されたものとみられる。

四、代官所手代、名主の勤め方の変更

右に述べた宝暦元年（一七五二）三月末の御米置場の火事に関連して、その時点で江戸に戻っていた幕府・出羽代官より同四月の御用状で酒田出役中の代官所手代や名主に対し、宿泊の件で重要な指示があったのであり、その指示をうけて庄内幕領のうち田川郡米納五〇力村の村役人たちは、四月中に連名で大山代官天野市十郎の大山役所に対して次のような歎願をした。

乍恐以書付奉願候御事⁵¹

一、羽州田川郡五拾ヶ村前々御廻米村二御座候処、年々一村別御米津出シ仕、前々酒田湊御囲之内二御代官所御四分御出役様方御詰所並詰名主詰所共二、前々より酒井左衛門尉様御普請被遊候処、外国二右之例無之候二付、自今已後ハ

酒田町最寄能場所二致町宅、御囲御米之儀ハ昼夜通ひ番二致シ御米^{（米）}ベリ方宜筋二被仰渡候趣、当四月十四日江戸御表御代官様方御用状酒田御囲御出役様方江到来仕候処、御囲早速引取町宅可仕候旨被仰渡、即四月十四日夜中二酒田小屋^{（酒田）}之浜と申所へ上下引取申候、御囲迄三丁余も御座候、御囲柵之内御米斗大楯二積立有之、只今最中御城米川下ケ時節、暫も御米立離候儀御米大切操廻し、大勢之川船舟頭御米丁持人足入込候節、当時小屋之浜より通ひ番仕、昼夜難義至極奉存候、詰名主小勢之差働方便二も行届兼、村々より加勢名主参申候間、昼夜入替り立替り御米相守申候、川船ハ御米水揚げ、海船ハ御積立最中二罷成り、御米請取渡し方二も入用之諸道具持運ひ差支候儀共多ク御座候、右二付増人失却宿賃相懸り申候、万^{（一）}御米粗末之義有之哉も無覺束奉存候二付、郡中大小百姓相歎申上候ハ近年至而困窮之百姓二御座候得共、酒田御囲御米を立離旅宿より通ひ番等仕候而ハ御米手廻し行届兼、重々之失却相懸り申儀二御座候へハ此上ハ村々百姓雜物等壳代替候成共入用出し可申候間、前々之通御出役様初、次二詰名主・沖上乘・召仕共住居所取繕、酒田御囲内二相建申度奉願候、弥願之通被仰付被下置候者、第一御米昼夜番人^{（米）}ベリ方宜敷專要二奉存候、為其村々名主・与頭・長百姓連判書付を以奉願候、以上

未四月

田川郡五拾ケ村

名主・与頭・長百姓

天野市十郎様

大山御役所

出羽幕領諸領の御城米（年貢米）を江戸・大坂廻米するために、毎年春から数カ月間各代官所等よりの出役の手代や郡中より選ばれた名主たちが御米置場に詰めて御城米の検査、及び廻米業務の指示や御城米の監視等を行うが、^{（米）}そのために御米置場の内に詰所・番所が設置されており、手代や名主等の関係者が宿泊できるようになっていた。ところが、先の御米置場の火災をうけてのことと推測されるが、江戸の代官一同よりの四月十四日到着の御用状では、他の国には

右のような例はないとして、御米置場での宿泊を禁じ、最寄の適当な所に宿所を定め、そこから御米置場に通って業務に当たるように命じていた。そこで、直ちに四月十四日の夜に御米置場での宿泊を止め、手代・名主とも西方に三丁（三〇〇メートル）余離れた高野浜村に宿所を定めて、同所から御米置場に通うことになった。四月といえば、廻米業務の最中であり、御米置場には大量の御城米が野積みされているうえ、新たに昼夜の別なく川下げされた御城米が搬入されるため、川船船頭や丁持人足等が頻繁に出入りしている状態であり、少人数の名主が高野浜の宿所からの通ひ勤務では眼が行き届かないし、廻米業務にも支障があるので、郡中より加勢の名主も来て昼夜交代で御城米の監視を行っているとするので、寝ずの番をしていることになる。それらにより村々の出費が増しているので、近年顕在化してきた百姓の困窮がますます進むことになる。そこで、前々のように出役中の手代、名主、上乘、召仕が御米置場に宿泊できるように詰所等を設置してほしいというものである。また、そうした方が御米置場の警備のためにもよいというのであった。この願書により、再建される御米置場には代官所手代や出役名主の宿所は再置しない方針であったことがわかる。それに対し、庄内幕領の米納五十力村では宿舎を再置してほしいというのである。

翌五月にも同じ田川郡五十力村より大山役所に同様な内容の歎願がされて、何とか夏中に宿所を設置してほしいとされていた。しかし、歎願は聞届けられなかったようであり、同じ五月に右五十力村の名主・組頭・長百姓・五人組頭が連判のうえ大山役所あてに承知した旨の請書⁵⁴を提出しているので、手代・名主たちが御米置場に宿泊せず、高野浜村のうちに宿所を定めて通ひで廻米業務に従事することを渋々ながらも承諾したのである。

その高野浜村の宿舎であるが、関連文書として次のような証文が作成されていた。

一札之事⁵⁵

一、酒壺石式斗

大概一ヶ月分

但、御人数拾三人

外出入 増式人斗ツゝ

右者御陣屋御役人中御遣酒二御座候、右之外勝手二寄他領酒取寄候ハ、御役錢差出可申候、仍而御遣酒たり共此末御陣屋を以ても時々他領酒船下り水揚之節、急度相断可申候、若取紛為御知不申上候者取押、取寄候而茂及異儀申間敷候、為後日一札如件

御陣屋衆御宿

宝曆二年

高野浜

申四月

作左衛門

酒御改所

これによれば、四月の時点で御米置場の定番人を代々勤める高野浜村在住の作左衛門が御米置場に詰める出役名主たちの宿舎を勤めることになっていたことが知られる。「御陣屋衆御宿」とあるので、名主たちばかりで、手代たちは別に宿舎を定めるものであったとみられる。ともかく、作左衛門方には十三人の名主が宿泊し、その他に二人ばかりの者が出入するとして、彼らが約一カ月の間に嗜むところの酒を一石二斗とし、おそらくこの分の役錢は免除されるもので、それ以外に他領酒などを取寄せた分については役錢を差出すこと等を誓約したものである。なお、名主たちの宿舎に入る二名ばかりとは、田川郡米納五十カ村からの応援の名主のことであろうか。

因に、御米置場に出役する名主は、これまで出役中だけ帯刀する慣行があったが、それに対し天野市十郎代官は、名主には帯刀を許さないという方針から、宝暦元年（一七五二）四月に郡中名主が酒田出役中に帯刀する理由を庄内幕領村々に問い質したのであった。その回答として郡中村々では、酒田は風が烈しく、家数が五、六千軒もある町であり、諸国より旅人が多く出入するので、火事や盗難の心配があるうえ、川船、海船の船頭・水主たちを相手にする仕事であり、様々の事故・事件を取扱ったりする必要があるので、帯刀をしていた方がよいとするものであった。⁵⁶

宝暦元年（一七五二）四月に、御米置場の内に手代・名主が宿泊できるような施設を置かないことにして、手代・名主の御米置場内での宿泊を許さないことにしたのも、おそらく天野代官の提案に他の出羽代官たちが同調する形で決定されたものではなかったかと推測される。

右の天野代官の就任により、寛延三年（一七五〇）五月頃に庄内の大山役所が出張陣屋から代官所に昇格し、それより宝暦十年（一七六〇）まで十余年余り代官所として存在した。⁵⁷ そのため、酒田の御米置場を利用するのは漆山・寒河江・尾花沢の三代官所に大山代官所が加わって四代官所になったことになるが、大山領など庄内幕領は従来から大山口などの呼称で御城米の木戸口の使用権を確保していたので、御米置場の使用方に変更の必要はなかったはずである。

ところが、宝暦三年（一七五三）に村山郡幕領の支配関係にかなりの変更がみられた。寒河江代官所は寛延二年（一七四九）に一時長瀬代官の預りとなつたうえ、翌三年には寒河江役所が尾花沢代官所の出張陣屋に格下げされていたのであるが、⁵⁸ 宝暦三年五月の寒河江の大火により寒河江役所も焼失し、その後長期にわたり再建されなかった。⁵⁹ すでに延享元年（一七四四）に長瀬代官所も復活して、宝暦三年二月に寒河江四力村などがその支配に入つたといわれる。⁶⁰

また同年四月までに、陸奥国小名浜代官所（現いわき市）の出張役所として白岩陣屋（現寒河江市）が設けられ、白岩村や周辺の村々を支配した。⁶¹ そうすると、宝暦三年五月頃の時点で、村山幕領には尾花沢、漆山、長瀬、白岩と四つの代官所、代官役所が設置されており、庄内の大山代官所を含めると五つの代官所・代官役所ということになる。それに応じて、酒田の御米置場の御城米搬入口である木戸も五つになっていけばよいわけであるが、次に記すように宝暦五年の時点で四つの木戸口しかなかったとみられるので、仮に白岩領と長瀬領などというように、二つの代官所・代官役所が一つの木戸口を共同で使用していたものと考えられる。

宝暦五年（一七五五）六月時の御米置場の図面が現存している。⁶² 一見して明らかのように、おそらく洪水による決壊のため御米置場の西側の方（正しくは西南と思われる）の一部が大きく削られており、御米置場の敷地が長方形ではな

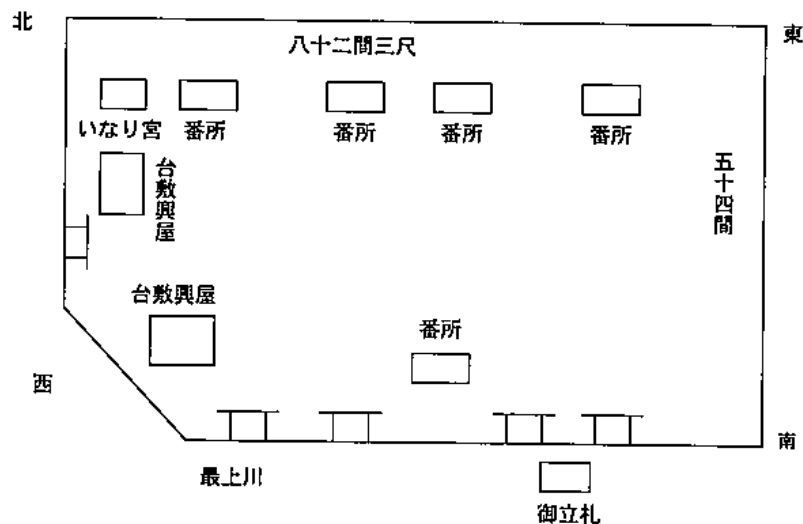
く、五角形の形をしているのであり、このような形となっていたのは今のところこの図面だけのようである。規模は、東西南北の方向が少々ずれているように思えるが、一応東西八十二間三尺、南北五十四間であるものの、西方の一部が短くなっているわけである。なお、欠崩れがない場合、面積は四四五五坪になり、前に元禄享保頃のものとして紹介した場合よりも若干規模が大きくなっていたわけである。

木戸口（門扉）は、最上川・新井田川側に四口、日本海側に一口、合せて五口あるが、日本海側の一口は代官所手代、出張名主、上乘、浦役人など関係者の通用口であつたとみられるので、残る最上川側の四口が御城米の出入口ということになる。前述のように利用する幕領が尾花沢、漆山、長瀬、白岩、そして大山と五領となっていたが、たとえば比較的小さな領地の白岩領が長瀬領などと共同で一つの木戸口を利用するなどで間に合せていたのであろう。御米置場内の建物として五つの番所と台敷小屋二棟、そして稲荷宮が置かれていた。従つて、宝暦元年（一七五

一）四月の出羽代官たちの指示通りに、それまで置かれていた手代たちが宿泊する詰所が撤去されていたことが確認できる。出張の名主たちが詰めて御城米や出入者を監視する番屋は引き続き置かれていたが、ここなどにも宿泊はしないことになっていたわけである。

稲荷宮は御米置場設置当初から勧請されていたかと思われるが、別当は天満宮の社家の五大院が勤めていた。⁶⁴

宝暦5年6月時の御米置場



注 (1) 酒田市立光丘文庫伊東家文書
(2) 内部の配置のみを記した。

むすびに代えて

酒田湊の御米置場は出羽幕領御城米の江戸廻米などのために、寛文十二年（一六七二）の設置より、明治維新まで二百年近くにわたり維持され使用されてきたが、本稿では約二百年のうち宝暦五年（一七五五）頃までの前期三分の一の期間に限定して御米置場の出来事を編年的に述べたものである。

ここでは、そのうちから重要と思われる事を数点挙げて「結び」に代えたい。

第一に、御米置場は寛文十二年（一六七二）の建設より貞享四年（一六八七）頃までは、南の最上川・新井田川側に向いた御城米出入用の木戸（門扉）は三つのままであったとみられる。

第二に、出羽幕領の拡大に伴い、江戸廻米となる御城米が増大したが、また代官所の数も増加した。そのため、元禄元年（一六八八）頃には御米置場が拡張されると共に、南向きの御城米用の木戸も一つ増加し、四つになったものとみられる。木戸口四つの期間は宝暦末年（一七六四）頃まで七十年以上続いたはずであるが、その間にも少なくとも二、三度の改築などがあって御米置場の面積はその度に拡張されたのである。

第三に、宝暦元年（一七五一）三月の酒田大火で御米置場も焼亡したため、間もなく庄内藩により再建された。その際、出羽代官たちよりの指示で、御米置場へ出役中の代官手代や名主たちの同所への宿泊が禁止され、西隣の高野浜村に宿泊し、通勤することになった。それに伴い手代詰所などは置かれなくなったのである。

第四に、宝暦五年六月の御米置場図が残されており、それによれば南向の木戸は四つのままであるものの、南西方向の一部が大きく欠込んでおり、御米置場は五角形になっていた。最上川の洪水によるものとみられるが、御米置場は立地上、常にその激流によって一部崩落する危険が存在していたのである。

註

- (1) 鶴岡市郷土資料館寄託文書
- (2) この瀬左衛門は小林家第二代とみられる(拙稿「庄内藩の大工棟梁小林松右衛門家(上)」、『鶴岡タイムス』平成十三年十二月一日号)。
- (3) 「酒井家旧記」十(写本、鶴岡市郷土資料館)
- (4) 享保十年と推定される已十一月「酒田浦役人勤方之覚」(「承露盤」巻十七、『酒田市史史料篇』四)
- (5) 鶴岡市史編纂会『大泉紀年』下巻六九頁
- (6) 拙稿「幕府世襲代官松平氏とその系譜」(拙著『近世前期羽州幕領支配の研究』第一章)
- (7) 『酒田市史』(旧版)上巻では「二棟の倉庫は屋根だけで、周囲を構えない土間であつたらしい」(二六九頁)と記している。しかし、この記述は妥当と思えない。
- (8) 「庄内藩湊御用控抄」(『酒田市史史料篇』四)
- (9) 「御大工棟梁余語所蔵ノ写」一(山形県史資料篇五『雞肋編』上巻)
- (10) 『酒田市史史料篇』(三)一二四・一二五頁
- (11) 「承露盤」巻十七
- (12) 仮題、庄内町狩川・長南氏所有文書
- (13) 「寛文十二壬子年川村瑞賢下向ニ付覚書」(『雞肋編』上巻)
- (14) 『新編庄内人名辞典』二七一頁
- (15) 酒田市・本間美術館蔵、なお酒田市史編纂室の元室長で郷土史家田村寛三氏の御教示による。
- (16) 拙稿「河村瑞賢建設当時の酒田湊・御米置場」(東北公益文科大学『総合研究論集』第八号)
- (17) 『編年西山郡史』(巻之四)一二頁、横尾半左衛門「寒河江役所」(『寒河江市史編纂叢書』第七輯)
- (18) 「最上記」(『寒河江市史編纂叢書』第二十二集)
- (19) 『新訂寛政重修諸家譜』(第十六)一四三頁

- (20) 『酒田市史年表 改訂版』一〇六頁、なお『雞肋編』上巻四八一頁を参照されたい。
- (21) 『酒田市史年表 改訂版』一〇九頁
- (22) 天和二年「延沢・大山両領御年貢米江戸廻納方入用帳(仮題)」(長崎村・柏倉家文書、明治大学刑事博物館)には洪水による被害については窺えないようである。なお拙稿「天和年間延沢・大山両領御城米の江戸廻米」『西村山地域史の研究』第十七号)を参照されたい。
- (23) 明和五年五月、庄内藩の「御米置場改築二付伺書(仮題)」(鶴岡市・致道博物館酒井家文書)
- (24) 『雞肋編』上巻(六五六頁)
- (25) 『酒田市史史料篇』八所収、なお原画は本間美術館蔵である。
- (26) 田村寛三氏の御教示による。
- (27) 『酒田市史』(旧版)上巻一六九頁で註(7)のような記述をしているのは、この「酒田古絵図」によっているものかとも考えられる。
- (28) 『御用帳』巻一『酒田市史史料篇』一一九頁
- (29) 『御用帳』巻一『酒田市史史料篇』一一五頁
- (30) 『御用帳』巻一『酒田市史史料篇』一一二頁
- (31) 『御用帳』巻一『酒田市史史料篇』一一二〇頁
- (32) 『余目町史年表』八一頁、『酒田市史年表 改訂版』一二九頁
- (33) 『御用帳』巻一『酒田市史史料篇』一一七九頁
- (34) 『承露盤』巻十七
- (35) 寒河江代官所は貞享四年に新設されたが、元禄七年には長瀬代官所の出張陣屋にされた。そして、正徳四年に代官所に復帰した(『寒河江市史』中巻七二頁、及び拙著『出羽天領の代官』一三三頁)。
- (36) 庄内幕領のうち余目領は江戸廻米をしていなかったし、また由利郡幕領(秋田県象潟町)は丸岡領と一緒に取扱われたとみられる。
- (37) 当時の庄内には幕府代官所の出張陣屋として大山役所と和名川役所の二つがあったので、一時大山口とかではなく、大山・和名川口とか庄内口とかと呼ばれていたはずである。しかし、十年ほどして和名川役所が廃止となったので、再び大山口と呼ばれるようになったのであろう。

- (38) 「承露盤」巻十七、なお史料のうちカッコ内は割注を示している。
- (39) 『酒田市史 改訂版』上巻六九〇頁
- (40) 白崎良弥『酒田港誌』七四頁、鶴岡市史編纂会『荘内史年表』一三九頁
- (41) 『尾花沢市史資料』第十一輯の解説(二二六頁)
- (42) 「幕府領代官一覽」(『山形県史要覧』二四三頁)
- (43) (44) 「酒田御米置場川前御普請御入用・御人足帳」(仮題、酒田市立光丘文庫伊東家文書)
- (45) 『酒田港誌』七七頁、『酒田市史年表 改訂版』一四九頁
- (46) 佐藤三郎『酒田の本間家』一〇〇頁
- (47) 河北町誌編纂史料『大町念仏講帳』一〇二頁
- (48) 「酒井家世紀」巻之七、『庄内史年表』一四九頁
- (49) 寛延四年五月「酒田湊御城米積所之儀二付被仰渡御請書」(「大口村御用留」羽黒町大口・斎藤家文書)
- (50) 伊東家文書(光丘文庫)
- (51) 「大口村御用留」
- (52) 十八世紀中頃に出羽幕領の御城米が増加したため、御城米川下げを春から行うのでは間に合わず、最上川での冬川下げが行われることになって、その分の御城米を一時酒田町蔵に入れることになった。そのため各代官所より手代一名と名主二、三名が十月下旬より三月まで酒田に出役し、浦役人宅に宿泊したという(延享四年七月「御尋二付申上候」、『酒田市史史料篇』一六四〇頁)。
- (53) 「大口村御用留」
- (54) 「酒田湊御城米積所之儀二付被仰渡御請書」
- (55) 天明八年六月「酒田御田万事御用留」(鶴岡市郷土資料館岩本文書)
- (56) 「御尋二付以書付申上候事」(「大口村御用留」)
- (57) 拙著『出羽幕領支配の研究』第五章「宝暦・明和年間の幕府代官(その一)」、及び拙稿「宝暦期の大山代官兼柴橋代官天野市十郎」(『西村山地域史の研究』第十一号)
- (58) 西沢淳男『幕領陣屋と代官支配』六五頁
- (59) 『寒河江市史』中巻七三頁

- (60) 『山形県史』(旧版) 卷(二) 八六五頁、『西川町史年表』一三五頁
- (61) 西沢淳男『幕領陣屋と代官支配』六七頁、なお支配代官は風祭甚三郎であった。
- (62) 伊東家文書、なお、この絵図面は平成十七年一月刊行の土岐田正勝『最上川河口史』(二一六頁)でも紹介されている。
- (63) 厳密に言えば、天野市十郎代官が村山郡に置いた出張陣屋は宝暦三年までは落合陣屋(現山形市)が、その後宝暦五年より柴橋陣屋(現寒河江市)が置かれたが(拙稿「宝暦期の大山代官兼柴橋代官天野市十郎」)、それらの分は大山領と共同で御米置場を利用したとみられる。
- (64) 『酒田往来』、なお五大院については田村寛三『続酒田みてあるき』三〇頁を参照されたい。